

市立函館博物館

友の会々報

No.67

箱館戦争と碧血碑

理事 木村裕俊



講演する木村裕俊氏

(はじめに)

平成三十一年(二〇一九)の今年、箱館戦争が終って百五十周年になります。一八六八年(慶応四年・明治元年)に始まった戊辰戦争と、それに続く箱館戦争で多くの戦没者がなぜ生じたのでしょうか。

大政奉還を経て新しい政体を作ろうとしていた矢先、徳川政権の影響が残ることを嫌った薩長連合と一部の公家が「王政復古の大号令」によるクーデターを起こし、無理やり戊辰戦争へと持ち込んだのです。平和裏に「大政を奉還」したはずの幕府は、「賊軍」の汚名を着せられてしまったのです。

江戸城が無血開城されると、徳川家四百万石は七十万石に石高を減らされて、ほとんどの幕臣は路頭に迷うことになりました。榎本武揚は旧幕臣の救済措置として、幕臣の「蝦夷地の開拓と防備」を要望したのですが、答えは「新政府に逆らう者はつぶす」とした強権的な政策で、榎本らを箱館戦争へと追い込んでいっ

たのでした。

榎本軍は、最初の年の「戊辰の役」では優勢でしたが、結局は多勢の新政府軍に敗れてしまいます。新政府軍は箱館戦争が終わった時、自軍の犠牲者は招魂社に手厚く葬りましたが、旧幕府軍の遺体は路傍に放置したままでした。これを箱館市民が自主的に収容して、埋葬したのです。「亡きがらに敵味方はない」との人道的な考えからだといえます。柳川熊吉や大岡助右衛門などの市民と、実行寺をはじめ多くの寺院が協力して埋葬したといわれています。

この旧幕府軍の戦没者の慰霊のために後年建立されたのが「碧血碑」です。高松凌雲の赤十字思想といい、旧幕府軍戦没者の埋葬といい、こうした心意気は国際的な博愛主義に通じるのではないのでしょうか。当時はすでに国際都市であった、箱館人の心意気が感じられます。

私たちはいま「箱館戦争」について考える時、単に箱館の地で起こった出来事としてだけ捉えるのではなく、一連の動静として「大政奉還」から「戊辰戦争」へと続いた混迷の中の一事象であったのだと考えるべきです。つまり「箱館戦争」を理解するためには、明治維新を形成しようとする日本の全体的な流れの中での、一つの事柄として捉える必要があるのだと考えています。

今回は「箱館戦争」を通じて、なぜ函館市に「碧血碑」が建てられているのか、日本の幕末の動静を見ながら話を進めていきたいと考えています。

1. 「大政奉還」と薩長連合

「大政奉還」とは、徳川幕府が朝廷から与えられた政権を朝廷に返上し、認められるという政治的な出来事でした。



「大政奉還」の図

慶応三年（一八六七）十月十四日に、徳川幕府が持っていた政権を第十五代将軍慶喜から朝廷に返上することを申し出たのでした。翌十五日に朝廷がこれを許可したこの出来事は、単に幕府の持っていた「大政委任」という権限を朝廷に返還するということだけではなく、徳川政権をも含めた「諸侯連合」により新しい形の公儀新政体を樹立させようとしたものでした。

しかし「王政復古」を目指す薩長連合をはじめとする討幕派は、徳川幕府を完全に廃絶しようと画策し、双方の暗黙の戦いが続けられたのでした。最終的に、クーデターによって成立した薩長連合の新政権から、徳川幕府の廃止が公式に宣言されたのは、十二月九日のことでした。

将軍・慶喜の「大政奉還」の表明は、徳川幕府が政権を全面的に放棄することを意味するものではなく、あくまでも薩摩・長州との内戦を避け、幕府の独裁体制を修正することにあつたのです。具体的には、徳川宗家を筆頭に諸侯らによる新たな公儀政体を樹立することにあつたのでした。しかし結果的に「大政奉還」は行われましたが、政治的駆け引きから想定されていた諸侯会議が実現されないまま、薩長連合を中心とする討幕派がクーデターを起こしてしまったのでした。

慶喜の進めた「大政奉還」と「公儀新体制」の政策は、困難な状況にありながらも途中までは慶喜の思う方向に進んでいたのですが、討幕派のクーデターと武力挑発に乗せられて自滅してしまったのです。

2. 戊辰戦争のはじまり

幕末から明治維新へと動く大きなうねりの中で始ま

った「戊辰（ぼしん）戦争」は、慶応四年（一八六八年九月に明治に改元）から明治二年（一八六九）にかけて起こった、日本最大規模の内戦でした。「戊辰」とは、慶応四年（明治元年・一八六八）の干支（えと）の名称から来ているのです。

「戊辰戦争」とは、王政復古のクーデターを経て、明治新政府を樹立した薩摩・長州・越前・尾張・土佐・安芸の雄藩を中核とした新政府軍と旧徳川幕府勢力との戦いで、鳥羽・伏見の戦い、会津戦争、箱館戦争など一連の戦いの総称です。結果的に明治新政府軍が勝利し、同政府が「日本国を統治する正式な政府」として国際的にも認められた戦いでした。

「戊辰戦争」はその内容から、三つの段階で整理することが出来ます。

- ①明治新政府と徳川幕府との政権を争う戦い。「鳥羽伏見の戦い」から「江戸城開城」までの戦い。
- ②中央集権を構築しつつある新政府軍と、残された地方政権「奥羽越列藩同盟」との面目をかけた戦い。「日光戦争」「越後長岡戦争」「会津戦争」などをいいます。
- ③旧幕臣の救済を目的とした「箱館戦争」。後の士族反乱などの「先駆的形態」の戦いでもありました。特に「箱館戦争」は、明治元年の戦いを「戊辰（ぼしん）の役」といい、同二年の戦いを「己巳（きし）の役」と呼んでいます。

「鳥羽・伏見の戦い」での戦闘が開始されたのは、慶応四年一月三日でした。京都の南郊外の鳥羽と伏見において、戦闘が開始されました。旧幕府軍と薩摩藩・長州藩・土佐藩の新政府軍の衝突でした。当初この戦いは、旧幕府軍と薩長連合軍などの私闘と見られていましたが、新政府軍側に「錦の旗」を建てたこと



鳥羽・伏見の戦い・
「豊後橋で発生した戦い」

で、「官軍」と「賊軍」に色分けされてしまい、勝負に大きな影響を与えました。新政府軍と旧幕府軍

とでは、武器の装備力で大きな差はありませんでした。まして旧幕府軍は三倍の兵力を持ちながら、旧態の戦術で緒戦から指揮命令の混乱や戦略の不備で、苦戦を強いられていました。薩長連合軍は、幕末期には薩英戦争や長州征伐などの戦いで、実戦経験を積んでいたため、作戦を有利に進めることが出来たのでした。

それにしても、将軍慶喜はなぜ大坂城で自らの将兵たちを見捨てて、単独で江戸にかえってしまったのでしょうか。敗戦の総大将としては、何らかの行動があつてしかるべきだったのではないのでしょうか。

江戸に帰った慶喜は、朝廷に対して「恭順謹慎」の態度を示し、勝海舟に官軍東征軍との交渉を一任した。交渉中慶喜は江戸城を出て、上野寛永寺に「謹慎」していたのでした。最終的に江戸城は、四月十一日に無血開城となったのでした。

3. 東北戦争への拡大

江戸城は新政府軍の手に渡りましたが、徳川家の聖地である日光廟に立て籠もって新政府軍と戦う勢力や旧幕府軍側の勢力は、江戸を脱走して東北方面で体勢を立て直そうとしていました。

会津藩は鳥羽伏見の戦い以後、朝廷に嘆願書を提出し天皇への恭順の姿勢は示していましたが、新政府の存在を認めずに、謝罪もしませんでしたし、武装解除もしていませんでした。新政府側としては鳥羽・伏見の戦いでは、会津・桑名両藩は旧幕府軍の主力戦隊であったことから、会津藩を「朝敵」と認定して討伐することとしていました。

翌月の閏四月四日に、仙台藩の主導で奥羽十四藩が会議を開き、新政府軍に対して会津藩と庄内藩を赦免

するようにとの嘆願書を提出しました。そしてこの嘆願書には「もし要求が受け入れられない場合には、新政府軍と敵対

し、排除する。」との声明が付けられていました。

また、五月に入って新政府軍と交渉し、自藩の武装中立を拒否された越後・長岡藩や新発田藩などの「北越同盟」六藩も加わり、合計三十一藩による「奥羽越列藩同盟」が成立しました。この同盟には直接関係者の会津・庄内藩は加盟していなかったのですが、「会庄同盟」として列藩同盟とは協力関係にありました。

九月に入ると、会津藩と共に戦って「奥羽越列藩同盟」を主導していた仙台藩でしたが、会津若松城で籠城作戦を取る頃から、新政府軍の北上する圧力が強まり、ついにその圧力に耐えられずに降伏してしまったのでした。

残された旧幕府軍の勢力は会津を離れ、品川を脱出して仙台に立ち寄った榎本軍と合流して、エゾ地に向かうことにしたのでした。

4. 箱館戦争

(1) 榎本艦隊、箱館を制圧（戊辰の役）

慶応四年（一八六八）四月、江戸城が新政府側に渡され、「戊辰戦争」はその舞台を越後・東北へと移していました。五月には新政府の徳川家への措置が決定し、徳川家直轄領四百万石と旗本領三百万石、合わせて七百万石であった幕府領が、駿河・遠江への移封・減封という措置でわずか十分の一、七〇万石になってしまいました。これでは徳川家の八万人といわれる幕臣を養うことは、とても困難であり、多くの幕臣が路頭に迷うこととなります。

これを、海軍副総裁に就任していた榎本武揚は、エゾ地に旧幕臣を移住させて、エゾ地の開拓と北方の防備とを担わせることを考えていたのでした。

榎本は新政府側に対して、江戸城が新政府側に渡された後も、新政府側に旧幕臣の措置を要望し続けていましたが、全く返事はありませんでした。

八月に入ると榎本は出港準備に取り掛かりました。勝海舟からは軽拳妄動を慎むよう言われていましたが、八月十五日に徳川家後継の家達（いえさと）が駿府城に入封するのを見届けてから、榎本は八月十九日の深夜に品川沖を出港したのでした。

艦隊は八隻で、まずは仙台を目指していました。開



「会津軍記」より

幕末動乱の責任を一身に受けて、明治新政府と戦うがために降伏し、その調印式に臨む。

陽丸を旗艦として、品川沖を出港した榎本隊は、その翌日から暴風雨に遭い、途中艦隊が散りぢりに



品川沖を脱出する開陽丸

なっていました。それでも九月中旬には何とか仙台沖に集結することが出来、仙台では直ちに艦の修理を行いました。

この間、榎本艦隊は大鳥圭介や旧新撰組副長・土方歳三ら主要メンバーと、旧幕臣の伝習隊や衝鋒隊、仙台藩脱藩の額兵隊など約千人を新たに収容し、エゾ地へと向かいました。

さて、エゾ地に着いた開陽丸は、箱館港に直接寄港しませんでした。箱館には新政府軍の防備施設があるため、危険を避けて安全な場所に部隊を上陸させることにしたのです。上陸さえしてしまえば、兵力数で上回る榎本軍は新政府軍と対峙しても難無く撃破できると考えたのです。そうしたことから、箱館の北方四十五キロメートルほどの所である鷺ノ木村（現・森町）を上陸地点として、十月二十一日に約三千人を下船・上陸させたのです。

鷺ノ木村に上陸した榎本軍は、三隊に分かれて箱館への進軍を開始しました。まずは無用な戦いを避けるため、先発隊を箱館府知事・清水谷公考（きんなる）への使者として先行させました。その後に大鳥圭介が率いる、峠下・七飯を通過して箱館に向かう隊と、土方歳三が率いる鹿部・川汲を経由して湯川から箱館に入る隊が続いたのです。

府知事の清水谷は五稜郭を放棄することを決め、青森まで退却したのです。榎本軍は、鷺ノ木村に上陸してわずか五日目で箱館の街を占領し、十月二十八日には五稜郭に無血入城しました。

その後松前城を攻略し、江差の街を占拠して、松前藩の新城である館城を陥落させてエゾ地を完全に制圧したのは十一月二十二日でした。この際 津軽に逃亡した藩主・徳広は、弘前に到着してすぐに咯血して倒

れ、亡くなってしまいました。その後は幼い修広（ながひろ）が継ぐことになったのです。

榎本軍が松前城を奪取したあと、開陽丸を箱館から江差沖へと向かわせました。榎本としては開陽丸の威力を実戦で試し、内外にその力を誇示しようとしたのです。しかし、この日の夜に入って、天候が急変したのです。開陽丸は、鷗島の近くに碇泊していましたが、強い風の力で走錨を始め、ついに座礁し、自ら動くことが出来なくなってしまいました。

無敵の主力戦艦であった開陽丸を失った榎本軍は、

これでエゾ地周辺の制海権を一挙に失ってしまったことになり、その後の戦局に大きな影響を及ぼす



「麦叢録付図・松前城攻撃の図」
（函館中央図書館蔵）

ことになってしまいました。

(2) 幻の「蝦夷共和国」

松前藩軍が榎本軍に降伏しました。エゾ地はこの時点で榎本軍に平定され、一般的にこの後は榎本武揚による「エゾ共和国」が成立したとか、「箱館政権」を樹立したといわれることが多いのです。

しかし榎本は、このような質問には「新政権樹立などは考えていない。エゾ地は日本国天皇の領地であり、我々は天皇の臣民である。」と答えていたといえます。ただ、榎本としては入れ札投票を行って、形式上エゾ地の総裁となって、外交上、政治上の当面の処置を行いたいと考えていました。

またもう一つは、榎本軍の組織はその成立過程からいくつかのグループに分かれて、必ずしも一枚岩の状態ではありませんでした。そのため、組織統合を図る意味で「入り札選挙」を行って組織の上下関係を確認することになったといわれます。

入れ札選挙後、榎本武揚を総裁とした榎本軍の体制は一応整ったのですが、財政事情が極端に悪化していました。そこで、会計奉行と副総裁の松平太郎が相談

をし、エゾ地の榎本軍にしか通用しない貨幣を発行しました。また、縁日の出店に場所代を掛けたり、賭博場の開帳を黙認する代わりに寺銭をまき上げたり、さらには「一本木関門」に通行税を掛けたのでした。

こうした榎本軍の政策には、箱館住民の大きな反感があったといわれます。

また榎本武揚は、軍事顧問ブリュネの意見を取り入れて、軍の組織機構を再編成しました。近い将来、戦うことになるだろう新政府軍への備えを整えていたのです。

(3)新政府軍の反撃（己巳の役）



「麦叢録付図・乙部沖の官軍艦隊」
(函館中央図書館蔵)

明治元年（一八六八）十一月十九日には榎本軍への追討令が出されました。

新政府軍の陸軍は、

明治二年（一八六九）二月までには、約八千名を青森に集結させ、榎本軍に対する反撃体制を整えたのです。

四月六日に青森を出発した船団は、同九日の早朝には乙部沖に到着していました。

榎本軍は、新政府軍の上陸を阻止するべく、江差から一連隊を派遣したが、すでに上陸していました。榎本軍の先鋒隊は、この軍隊に押され気味でした。両軍が小競り合いを続けていましたが、新政府軍の艦隊から砲撃され後退を余儀なくされました。

ここから新政府軍は箱館に向けて、四つのルートから進軍してきました。一つ目は江差から海岸沿いを松前方面に向かう「松前口」であり、二つ目は上ノ国から山越えで木古内に向かう「木古内口」です。さらに三つめは乙部から厚沢部の鶉を経由して大野に向かう「二股口」であり、四つ目が乙部から内浦湾側の落部を目指す「安野呂口」でありました。この四つのルートから箱館に向けて進軍を開始したのでした。

榎本軍はいずれの戦いでも撤退を余儀なくされ、ついには箱館に後退してしまいました。

土方歳三の一隊は台場山（現・北斗市）で新政府軍を待ち受けていました。土方隊は、ここに二日かかりで十六カ所の塹壕を掘り土塁を築いて、新政府軍の到着を待ち受けていました。新政府軍七百名が到着して攻撃を開始してきました。これに土方隊は、土塁を楯に小銃で応戦しました。数に勝る新政府軍は、次々と兵を入れ替えては繰り返して攻撃を仕掛けてきました。

戦いは雨の中でしたが、土方隊は二小隊を一組として、後退しながら小銃を撃ち続けました。翌十四日の早朝に、新政府軍は疲労が極限に達し、ついに稲倉石まで撤退させたのでした。しかし、矢不來が新政府軍に突破されたため、二股口の榎本軍は、退路を断たれる危険性があったため、土方隊はやむを得ず五稜郭に撤退したのでした。

(4)箱館総攻撃

新政府軍は、箱館総攻撃を五月十一日と決めていました。榎本軍が五稜郭の北に急造した四稜郭では、松岡四郎次郎が率いる一連隊が防戦していました。しかし、五稜郭との中間に位置する権現台場を新政府軍に占領されると、退路を断たれることを畏れて五稜郭に敗走してしまったのでした。

新政府軍は、夜陰に紛れて箱館山の裏側から上陸してきました。一隊は、箱館山西側の山背泊から上陸して弁天台場の背後に迫りました。そしてもう一隊は、箱館山・裏手海岸の寒川地区から上陸し、絶壁をよじ登って山頂に到達しました。この時、山頂で監視していた榎本軍の監視兵は、驚いて逃げ出してしまったといわれます。新政府軍は、夜明けまでに箱館山を占領してしまいました。

箱館市街を制圧した新政府軍は、一本木関門の方に進出してきました。この時土方歳三は孤立した弁天台場の救出に向かったのですが、一本木関門の付



「新政府軍・箱館総攻撃」の図

史料によっては『函館区史』のように、箱館戦争全体の犠牲者数と、箱館市街総攻撃の時の犠牲者数を混同しているものもあります。箱館市街に散乱して、後日市民が収容埋葬した遺体数は、五月十一日に箱館総攻撃が開始されてから十六日の千代ヶ岱陣屋の戦いまでの間の戦死者です。これを日付や戦死地などから推定すると、この間の戦死者はおよそ百五十名程度となります。この遺体こそが箱館市民と寺院によって収容された人数であったと推定されます。

6. 碧血碑の建立と慰霊

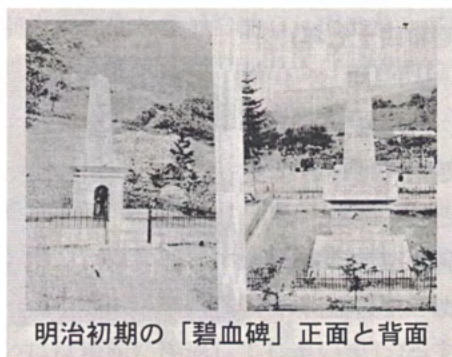
明治二年（一八六九）、に箱館戦争が終結した時、榎本軍戦没者の遺体は路傍に放置されていました。これを箱館市民と寺院が自主的に埋葬したという経緯は述べました。榎本武揚や大鳥圭介ら、旧幕臣たちがこのことを知ったのは、保釈後の明治五年（一八七二）以降のことでした。

彼らはこのことに心を動かされ、募金を集めて「戊辰戦争の最終地・函館」に、「戊辰戦争以来の戦死者の碑」を建立することを思い立ち、その実現に至ったといわれます。特に、建設費三千百六十円のうち二百五十円は、当時樺太問題でロシア公使館に勤務していた榎本武揚が拠出したといえます。

碧血碑は、明治六年（一八七三）に大鳥圭介が、箱館の地を実際に踏査して、翌七年に伊豆産の石材を以って東京・霊岸島でこれを刻み、同八年に竣工させることが出来ました。

碧血碑は、函館山のふもと谷地頭の丘に建っています。明治元年（一八六八）から同二年にかけて起こった、戊辰戦争・箱館戦争で戦った旧幕府軍の戦没者慰霊の記念碑だといわれます。しかし、碧血碑が建てら

れたのは明治八年（一八七五）五月ですが、この碑は単なる戦没者慰霊の記念碑ではありませんでした。



明治初期の「碧血碑」正面と背面

碧血碑の背面に「明治の辰年と巳年（元年と二年）に、実際に此の事（箱館戦争）があった。山の上に石を立て（碧血碑）、以って厥（そ）の志を表す。」との漢詩があります。

碧血碑が建立されたのは箱館戦争が終わって七回忌に当たる明治八年でしたが、それでもなお敗戦した榎本軍は「此の事有り」としか表現できませんでした。戦没者の冥福を祈るには、まだ世間に憚りがあったのです。

榎本武揚や大鳥圭介など、後年まで生き残った人たちがこの碑を作り、戊辰戦争の最終戦地となった函館の地にこれを建て「碧血碑」と名付けて、戦死者の魂を慰めることとしたのでした。

「碧血碑」の名称は、中国の古典にある「義に殉じて死んだ者が流した血は、三年経つと地中で碧玉（宝石）に化す。」から大鳥圭介が名付けたといわれています。

明治六年（一八七三）に、東京で「碧血社」という組織が結成された。戊辰戦争で犠牲になった、旧幕府軍戦死者の霊を弔うために「碧血碑」を建て、慰霊することを目的とした組織でした。この「碧血社」から函館の近松松三郎・宮路助三郎等十一人に「碧血碑」の護持とその取締りを委託したのでした。「碧血社」の名前は、後に「東京碧血会」、「函館碧血会」に発展していったことは間違いないでしょう。

碧血碑は、東京に在住する「箱館戦争」参加者の中から、建立の声が起ったのだといえます。特に榎本武揚や大鳥圭介が中心となって「北国にさまよう旧幕府軍戦死者の霊を弔うため、戦争終焉の地に一大墓碑の記念碑を建てよう」と呼び掛けて、拠出金を募りました。建立の総費用は、材料費・海陸の運送費・工賃などを含め、およそ三千百六十円かかりました。当時の米の相場から類推すると、現在価格では約五千八百万円にも相当するそうです。

7. 碧血碑建立に携わった人たち

(1) 碧血碑建立の経緯

「東京碧血会」は、明治六年（一八七三）に結成された「碧血社」が前身でした。碧血碑建立の募金に応じた戊辰戦争関係者の顕彰のためと、碧血碑保全を行

うために、募金運動と前後した時期に結成したのが始まりと考えられます。メンバーとしては、榎本武揚・大鳥圭介らが中心になっていたことは彼らとその関係者が「函館碧血会」に活動資金を送金し続けていたことから伺うことが出来ます。

明治六年に大鳥圭介が来道した際に函館に立ち寄り、谷地頭の丘を視察していったことから、「戊辰戦争」の終焉の地函館に記念碑を建てることで、実現に向けた動きが出てきたのでした。そして明治七年(一八七四)には、東京湾霊岸島で石碑が刻まれた。発注は「東京碧血会」で行い、後の護持と取り締まりについては函館のメンバーである近松松三郎や宮路助三郎等に委嘱することとしていました。

一方現地の函館では、発起人たちが明治八年(一八七五)の五月から石碑の建設予定地の整地に取りかかっていました。全長十三尺(約四メートル)の石碑が東京で完成し、海路函館港に到着したのです。石碑の部材が谷地頭の丘に運ばれて、高さ十尺(約三メートル)の台座が組み立てられ、その上に「碧血碑」と大書された石碑が据え付けられました。石碑の堂々とした姿が見られたのは、九月初旬のことでした。

(2) 函館碧血会のメンバー

草創期の「函館碧血会」は、幕臣の宮路助三郎や会津藩士などが幹事・役員を務め、柳川熊吉や大岡助右衛門などの実行寺の有力檀徒、あるいは箱館戦争に参加していた幕府艦隊の乗組員、従卒、中間、職人などの卒族や平民が幹事を支援するような組織になっていたようです。「函館碧血会」も最初から会長を置いていた訳ではなく、何人かの幹事の中から代表を決めていたようです。

当時の「函館碧血会」の代表者の名前を書いた史料は多くはありません。それもほとんどが断片的な史料ばかりです。碑内に納められている経箱の表書きには「当所発起人、武田菊平、杉山某、岡田利助外、十一名」とありますし、『碧血碑建築始末』には「松尾日隆、其他十一名」とあります。詳しく全員の名前は確認できないのですが、この人たちが当初の「函館碧血会」草創期のメンバーであったと考えられます。

明治八年(一八七五)の開拓使函館支庁への提出文

書の届け人として、松尾日隆以下十二名の名前が記載されています。そのなかには、柳川熊吉がおり、大岡助右衛門の代理人として「為六」という名前が記されています。彼らは「函館碧血会」の世話人として活躍していますが、当初から中心的な役割をしていたと思われれます。

(3) 「函館碧血会」、歴代会長

① 草創期の代表幹事(明治六年～十九年)

近松松三郎

箱館戦争時には工兵隊差図役を務めた人物。

宮路助三郎

会津藩出身の旗本です。

「戊辰戦争」中、仙台や庄内で奮戦していたが、戦後江戸糺問所に送られたため箱館戦争に参加出来ませんでした。



宮路助三郎

② 初代会長(明治十九年～大正八年)

和田惟一

宮路助三郎の実兄。箱館戦争に参加するも、途中で船が遭難し参加出来ず。明治十五年箱館に移住。宮路助三郎の仕事と碧血会活動を引き継ぐ。



和田惟一

③ 第二代会長(大正八年～昭和十五年)

和田潤三郎

和田惟一の三男。函館生まれ。東京帝大工学部卒業、函館船渠常務。甥の貞一は後に函館碧血会の顧問。



和田潤三郎

④ 第三代会長(昭和十五年～昭和四十七年)

藤野正路

和田一族で、和田惟一長女の次男。函館市内に耳鼻咽喉科の医院として開業。函館市に碧血碑を譲渡移管する。盗難にあった碧血碑の文字を復元する。



藤野正路

⑤第四代会長（昭和四十七年～平成四年）

柳川徳蔵

柳川熊吉から数えて三代目。熊吉・富次郎・徳蔵へと続く。熊吉・富次郎は世話人として活躍。碧血碑管理人が不在になってからは、自分が管理人として住み込む。

⑥第五代会長（平成四年～平成二十三年）

柳川昭祈治

⑦第六代会長（平成二十四年～）

大谷長道

8. 碧血碑の構造

碧血碑は、全体の高さがおおよそ七メートルにも及びます。石碑の構造は、上下二層構造になっており、下半部分の石室構造の上に上半部分の石柱が乗せられた構造となっています。上半部の方形の石柱は「オベリスク型」という形式の大きな碑が載せられた形になっています。

この「オベリスク型」という言葉は、本来はギリシャ語だそうです。こうした特殊な形式の例は、古代エジプト神殿の門前などに多く建てられているのだといます。上に行くほど細くなる不等辺四角形となっており、頂上だけピラミッド型となっています。先が尖った石柱であることから日本語では「方尖塔」とも呼ばれている形式です。

石室内にはかつて戦死者の遺品として、砲弾や武器・金属類が沢山納められていたようです。大正八年（一九一九）の開道五十周年記念に発行された「五稜郭内歴史館陳列品目録」にも、遺品として「銃剣」や「陣笠」などが函館碧血会所蔵として含まれていました。



「碧血碑・正面」

これらのほとんどは、戦時中に供出させられたり、戦後に盗難に遭ったりして、現在は「木製祭器」以外は何も残っていません。

木製祭器は、下から四本の脚で受けた

「台座」と、その上に「経箱」と見られる箱がはめ込まれており、経箱の上に「霊璽」が置かれています。これ等の祭器の材質は全てヒノキです。この中で特に、台座の脚部が著しく腐食していたため、平成二十五年に修繕を実施しました。修繕内容は、台座を新しく作り変え、経箱と霊璽をクリーニングしました。

木製祭器の一番上に納められているのが「霊璽」です。幅十二センチメートル、高さ三十六センチメートルの霊璽本体が載っていて、その正面には「戊辰以来戦死者之霊璽」とあり、裏面には「明治八年歳次乙亥九月十四日 招魂祭執行」と書いてあります。霊璽の表面は、陰棲昆虫のフンやカビなどにより文字がやや見えにくくなっていました。



霊璽と経箱（仮）

「霊璽」とは、神道において仏式の位牌にあたるものをいい、故人の御霊を霊璽に移して祀るのだといます。

台座の上に幅三十九センチメートル、奥行二十九センチメートル、高さ二十一センチメートルの箱があり、蓋が載った状態となっていました。箱は「経箱」と決めつける事は出来ないのですが、「…木箱の中には経巻がギッシリ納められていた。」と書いていた史料がありました。今は何も入っていませんが、この文章から仮に「経箱」と呼んでいるのです。

9. 碧血碑前での「慰霊祭」

最初の碑前慰霊祭は、碧血碑が完成した明治八年（一八七五）九月十四日に、実行寺の松尾日隆師によって、仏式で執り行われました。そして、その三日後の九月十七日に隣接する東照宮（現・函館八幡宮）の宮司によって神式の祭事が行われたのでした。碧血碑・碑前慰霊祭の始まりでした。

碧血碑の完成により、その管理と慰霊祭の執行は「函館碧血会」に託されていました。草創期の「函館

碧血会」は、幕臣で士分の者が幹事を務め、従卒や中間、職人などの平民身分の人たちが多く支援する体制を取っていたようでした。

明治四十四年（一九一一）六月十三日付けの「函館毎日新聞」に、当時の碧血会の記事が掲載されていました。「碧血会」と「碑前祭」に関する記事でしたので、その内容を以下に掲載します。

- ①碧血会 六月十日～十一日に施行。
- ②大施餓鬼 六月十一日午後二時から施行。
- ③碑前祭での撮影 同日午後四時から行なう。
- ④撮影後、柳川亭に五十余名参集し「直会」を実施。
- ⑤主な参加者たちの氏名

一ノ瀬控訴院長、池上検事長、入交検事正、沢辺検事、二瓶検事、永岡検事、常吉税関長、広谷源吉、岡本忠蔵、金沢彦作、八木橋栄吉、寺井四郎兵衛、望月日謙（実行寺住職）、佐藤槌之丞、沢口淡、和田惟一（初代会長）、真野清之助、田中浩の名前が挙げられていた。

この碧血会の会合で、特筆すべきは「従来は、直接関係のある幕臣および会津出身者に限られていた会員を、広く募集する」ことが、提案されたといえます。

「函館碧血祭」は毎年六月二十五日に行なっています。この日は旧暦の五月十六日に当たります。千代ヶ岱陣屋の中島三郎助が新政府軍に挑んだ最後の戦いの日です。これが箱館戦争最後の日にあたります。

近年は、市民や関係者の関心も高く毎年この碑前祭には、八十名ほどの出席を頂いて式典を行っています。

平成三十年は「百五十回忌特別法要」を実行寺で行いましたので、「碑前慰霊祭」は神式で行いました。



平成30年の碑前慰霊祭

10. 碧血碑の墓守

かつては「碧血碑」のすぐそばに、「碧血碑」の墓守の家があり墓守が住んでいました。

この墓守は、明治から昭和の初めごろまで献身的にその職務を担っていました。墓守は「函館碧血会」から委嘱された人でした。柳川熊吉も晩年は碧血碑に近い谷地頭に居を構えて、この人と共に墓の管理をしてその生涯を終えたといえます。

熊吉が碧血碑の保全・管理を行うに当たっては、東京在住の関係者や函館在住の役員の意を受けて、常に脇役に徹して「碧血会」を陰から支えていました。

熊吉の跡を継いだ柳川家二代目の富次郎氏も、碧血碑の世話人として地道に会を支え、後年は管理人不在のため、自らが管理人住宅に移り住んだ時期があったといえます。富次郎もまた、熊吉の心情をよく理解し、晩年は墓守として過ごした人でありました。

いま、恒例の碧血碑前祭の日になると、元管理人住居跡の地は参加者の駐車場になっています。といっても、四・五台も駐車すると、満車になってしまうような狭い広場です。この狭い広場を囲む緑の木立、ここに碧血碑の墓守の住宅があったのです。

「碧血碑」の管理費は、東京と函館に「碧血会」を組織し、東京から函館の和田唯一の会社（丸和合名会社）に毎年供養の五十円余りを振り込んで、供養を続けていたのです。

函館の和田唯一は榎本の支配人として、墓守の住宅地を箱館県令に払い下げ申請をして、明治十八年二月に許可されています。この時の墓守は、かつて箱館奉行・堀織部正のもとに勤め、箱館戦争にも参加し、戦後には遺骨の収集も行った人であったといえます。この家族は、明治から昭和の初めにかけて、三代にわたって碧血碑の管理人を務めていたのですが、昭和八年にブラジルに移住しました。その後は、管理人である柳川氏富次郎に任されたのです。

「碧血碑」の管理人が不在となって以降は、柳川富次郎氏が兄弟たちとこの管理人住宅に移り住んでいたといえます。富次郎たちは、昭和八年から十年まで住んでいたようですが、この年に富次郎が六十六歳で亡くなってからは、誰も住まなくなり空き家になってしまったそうです。

終戦後管理人住宅は、ガラスが壊され廃屋状態となり、そしていつの間にか建物も撤去されて、月日が流れていきました。そしてその跡地は雑草と雑木に覆わ

れ、何も無い広場が変わっていったのです。

11. 碧血碑の受難

昭和三十一年（一九五六）十一月のことです。「碧血碑」の青銅文字の「血」と「碑」の文字が無理やり剥ぎ取られて、盗難にあったのです。賊は碧血碑上部にやぐらを組んで、バリ・金づちを使ってこの二文字を剥ぎ取り、持ち去ってしまったのです。翌日碧血会役員が巡回中にこれを発見し、函館水上警察署（現・函館西警察署）に届け出ました。この頃、「くず鉄ブーム」に便乗して公共施設の金属製品を狙う不心得者が後を絶たかったのです。

碧血会としては緊急措置として、木製の文字板を作りそれに銅板を被覆して掲げました。「碧血碑」の三文字は青銅製（ブロンズ）の鋳物で、一文字の重さは残った「碧」の文字で約六十キログラムあり、その被害額はおよそ六万七千円だったといえます。

事件が解決したのは、翌昭和三十三年（一九五七）七月でした。犯人は少年を含む三人の若者で、遊興費欲しさに犯行に及んだのです。犯人は青銅文字を盗んだ後、しばらく縁の下に隠して時が経ってから潰して原型が分からないようにして、雑品屋に売り払っていたそうです。そのため、回収した時には使用出来なくなっていました。

碧血碑の「碑文字」は、その後も木製の文字板に銅板を被覆して使用していたのですが、会員からも「昔の金属製に戻そう」という機運が高まり、寄付を募って青銅製の「碑文字」に作り直すことにしました。この運動には、当時の第三代会長・藤野正路氏が熱心に取り組み、函館文化会などからの応援もあって、ついに、昭和四十三年（一九六八）九月に新しい「碑文字」が完成したのです。

またこの機会に碧血碑前庭の整備をし、除草や砂利を入れ替えて、広場全体をきれいにしました。

（おわりに）

今年、平成三十一年（二〇一九）という年は、明治二年（一八六九）に箱館戦争が終って百五十年目にあ

たります。「明治維新」という名で、古い幕藩体制を打ち破り、西欧世界に飛び出して「新しい日本」を作った変換点となった年だったといわれています。いま街中では、これを祝い「北海道命名百五十周年」、「箱館戦争終了百五十周年」と祝賀ムード一杯です。

しかし別の角度から見ますと、クーデターにより徳川幕府から力づくで政権を奪い、会津藩など自らの意に沿わない勢力を徹底的につぶし、幕臣・士族の生活救済などは全く顧みない方針でした。強い政権を作ろうとしたのですが、偏った強権的政策の反動は後の士族反乱という形で現れてきます。そしてそれを抑圧した明治政府は、「富国強兵」を掲げて日清・日露戦争へと突き進んでいったのです。

振り返れば戊辰戦争に至る前に、平和的に新政体に移行しようとする動きはあったのです。幕府が大政を奉還をして、朝廷に新しい政体を作ろうとしたのですが、薩長連合は政治的駆け引きをエスカレートさせて、旧幕府を戊辰戦争へと引きずり込んだのです。

箱館戦争が終り七回忌を迎えた明治八年に、榎本ら旧幕府軍で生き残った人たちが最後の戦いの地に「碧血碑」を建立しました。「碧血碑」に眠る多くの兵士たちは、大げさにいうと消えゆく徳川家臣団の「義」のために戦った人たちでした。

ある者は己の「士道」を貫き、またある者は「北の大地の開発と防備」を、さらにある者は「西欧列強と対等な関係を作る」ことを新政府に求めて戦ったのです。「碧血碑」の創始者の一人である大鳥圭介は「彼らの血は義に殉じて『碧玉、になった』」といってそれを碑銘にしたのだといえます。「碧血碑」に眠る旧幕府軍の兵士たちは、まさに「碧玉の志士」であったといえるのではないのでしょうか。

私たちはいま、こうした歴史をしっかりと見つめておくことが大切だと思っています。今年「箱館戦争が終って百五十年を迎える」にあたりそんなことを考えながら書き綴ってみました。



（了）

平成30年度の主な事業（報告）

1. 「友の会通信」・「友の会会報」の発行

- (1) 友の会通信 第47号（平成30年10月30日）、第48号（平成31年1月31日）。
- (2) 友の会会報 第67号（平成31年3月31日）

2. 例会・講座等の開催

- (1) 講演会（総会終了後に開催）平成30年5月30日（水）参加者26名。
演題 「五稜郭築造計画の変遷」 会場 五島軒本店
講師 市立函館博物館友の会 副会長 田原 良信 氏
- (2) 道南の博物館等施設めぐり（上ノ国・八雲町熊石・森町の歴史散歩）
平成30年7月11日（水）参加者26名
勝山館跡ガイダンス施設、勝山館跡、旧笹浪家住宅、八雲町熊石歴史記念館、森町郷土資料室、森町遺跡発掘調査事務所（鷺ノ木遺跡）
- (3) 東京国立博物館施設等を訪ねる旅
平成30年11月13日（火）～15日（木）2泊3日 参加者12名
東京国立博物館、はとバスツアー（お台場海浜公園・東京タワー・国会議事堂）、江戸東京博物館
両国国技館、相撲博物館
- (4) 会員発表会
平成31年3月29日（金）会場 五島軒本店 参加者28名
テーマ 「箱館戦争と碧血碑」
発表者 市立函館博物館友の会 理事 木村 裕俊 氏

3. 博物館事業の後援・協力

企画展「北の昆布展—昆布が支える日本の文化」、新収蔵資料展、博物館講座等の後援・協力

現在、次の企業・団体から協賛をいただいております。改めてお礼申し上げます。

- ・(株)エスイーシー ・金森商船(株) ・(株)建築企画山内事務所 ・(株)五島軒 ・五稜郭タワー(株)
- ・(株)佐藤公郎建築設計事務所 ・(有)三和印刷 ・(株)千秋庵総本家 ・(財)相馬報恩会

(敬称略・50音順)

市立函館博物館友の会会報 No.67

発行所 市立函館博物館友の会

印刷所 (有)三和印刷

電話 0138(45)0845

平成31年3月31日 発行

〒040-0053 函館市末広町21-12

電話 0138(27)3344

振替口座 函館02650-0-2216